

こそだて通信

2012年10月号

==こどものころ==

少しずつ秋が深まってきましたね。

稲刈り前の田んぼが広がる道を歩いていた時のことです。田んぼの上を撫でるように吹く風の匂いに、思わず足を止めました。

もう何十年も忘れていた、懐かしい匂いだったのです。

雨上がりの湿気を含んだ土と稲穂の匂いは、涼やかな虫の音を背景にして、田畑で遊んだ子どもの頃へと一瞬にして私を連れ戻してくれました。

私は穏やかでほっこりとした気持ちになって、その風をめいっぱい味わいたくて、何度も深呼吸したほどです。そばにいた娘は怪訝そうな顔をしていましたが。

聖路加国際病院の日野原重明理事長は、もうすぐ101歳になられます。病院の屋上で行われた夏祭りで、「なんだね、これは」とラムネを飲んだ時、「ラムネじゃないか、95年ぶりに飲んだ」とおっしゃったそうです。

95年前の記憶が一瞬にしてよみがえる日野原先生の感性にも驚かされますが、子どもの頃の記憶は消えているわけではないんですね。その時、先生の中には、95年前の夏祭りの色や匂いや音が鮮やかに再現されていたかもしれせん。

子どもの頃の嬉しい体験、暖かな匂い、大好きだった味、誰かの笑顔。

そういった記憶は、思い出せばいつでも、自分を幸せな気持ちにさせてくれる力があります。時には、苦しい自分の支えとなったり、よりどころとなるかもしれません。

そんな記憶を子どもに残してあげられる事が、子育ての中で何よりも大切なかもしれない、と感じた散歩道でした。

(臨床心理士 藤井あづさ)